

「向こう岸へ渡ろう」(マルコ四・三五〜四一)

1 嵐の中で

教会の祈祷室の壁に今日の箇所を題材にした渡辺禎雄(1913-96)の型染めによる版画が掛けてあります。

波に翻弄される一艘の舟、小さな舟なのでしょう、イエスと二人の弟子が乗るともういっぱいです。もちろん動力などありません。画面の上のほうには強い風を受けて膨らむ帆が描かれています。一番左の帆は、風のためロープが切れて、旗のようになびいています。

昨年この版画をいただいたとき、どれがイエス様だろう、ひとしきり話題になりました。私も一瞬分かりませんでしたが見ていた皆さんが、だんだん真ん中の人がイエスではないかと言いはじめて、多数決ではなくて(!)、やはり真ん中で、緑と黄色の服をまとい、まっすぐ前を向いているのがイエスだということになりました。間違いないと思います。周りを囲んでいる一二人の弟子たち、イエスに、すぐ下から手を伸ばし何やら懇願している人を除いて、みなそのまなざしは、その不安なまなざしは、あるいは暗い空に、あるいは周りの波に向けられていて、イエス以外だれ一人として、静かに落ち着いて前を向いている人はいません。

ここに描かれたことがガリラヤ湖の上で起こったのです。ここにあるのは決して作り話ではありません。ペトロが、ヨハネが、ヤコブが、弟子たちがみな経験したこと、彼らは目撃証人です。

聖書によれば、イエスご自身が、「向こう岸に渡ろう」といって、弟子たちとともに舟で出かけられたのです。

夕方でした。弟子の中にはペトロやヨハネなどガリラヤの漁師が四人もいて、海のようにだといわれたこの大きな湖が、周りの山から吹き下ろす風のため、しばしば突然嵐になることをよく知っていました。その日一日穏やかで夕暮れを迎えようとしていたとしても、もう夜です。早く行かねば、あまり準備する間もなく出かけて行った様子が、「群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたままこぎ出した」(三六節)というようなどころに感じられます。

こぎ出すと、案の定、風が出てきて、それがだんだん激しくなっていくきます。舟は小さい。波にもてあそばれ、いかんともしがたい。夜です。暗黒の中で、彼らは恐怖につき落とされたのです。波が激しく舟に侵入してきます。少し高くつくられていた艫のほうはまだ大丈夫だったのでしょうか。もしそこまで水がくれば舟は完全にアウトです。

イエスはどうしていたのでしょうか。彼は「艫の方で」枕をして眠っておられた(三八節)とあります。艫とは舟の後ろにあつて舵取りをする人が座るところです。

ところでイエスが「向こう岸へ」行こうとしたのは、群衆から離れて、しばし休息するためだったという理解があります。他の箇所にはそうした場面もあります。そうとれば、イエスは疲れておられ、嵐の中でも熟睡していたという、いささか人間的に

すぎるとしても、そうした理解が成り立たないわけではありません。

いずれにしてもイエスは眠っておられます。熟睡しています。この眠っているイエスのことは弟子たちの脳裏に深く刻まれていたことです。われわれが恐怖でおじまどつてバタバタしていたあのとき、われらの主イエスはひとり艫のほうで眠っておられた。やがて（イエスの言葉によって）嵐が静まったとき、それまで眠っていたイエスのことはいつそう忘れがたい記憶として残ったのではないでしょうか。

嵐の中、弟子たちは、イエスをお起しにかかります。訴えます。「わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」。溺れても、と訳されているのは、本来もつと強い言葉です。滅びるという意味です。

弟子たちの訴えに、「イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、黙れ、静まれと言われた。すると、風はやみ、すっかり風になった」（三九節）。これがここでの出来事のあらましです。

2 向こう岸に

渡辺禎雄さんの版画にはじめにふれましたが、今日の箇所を描いた絵は、古い時代にもないわけではありませんが、近代になって盛んに取り上げられるようになった画題のように思われます。

好んで描かれるその一つの理由は（これは私見にすぎない）嵐の中を、波にもまれながら、しかし向こう岸目ざして進んで行く舟の姿に、苦難と試練の中でおキリストを証しする教会、あるいは波頭を越えて海外へと伝道する教会というようなものが重なって、受けとられたからではないかと思えます。海を越えて出て行くだけでなく、海を越えてやってきたという意味でも、舟をあしらったマークが教派のシンボルとなっているところもあります（たとえばドイツ改革派教会など）。

じつさい舟は、聖書ではノアの箱舟がそうであるように、一般に教会を表すとしてよいと思えます。

舟が教会を表すとなると、「向こう岸に渡ろう」というイエスの呼びかけを、休息をとるためというよりは、むしろやはり、さらに神の国を宣べ伝えていこうというイエスの積極的な呼びかけとも理解されます。そのほうがこの状況に合致しているように思えます。五章一節を見てください。

一行は、湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた霊に取りつかれた人が墓場からやって来た（五・一）。

ここが向こう岸です。聖書はここを「ゲラサ人の地方」と呼んでいます。悪霊が支配していたようです。「汚れた霊に取りつかれた人が墓場からやって来た」とあります。教会は、かくて、風と嵐について、向こう岸へ、すなわち、ここではないところへ、悪霊にとらえられた人間を、この一人の人間を救うために赴きます。

考えればキリスト教の歩みはいつも、向こう岸へわたって、ここではないところに

行つて伝道する歩みでした。

先週取り上げた聖書（マタイ九章）によれば、イエスは、徴税人のもとへ、罪人のもとへと赴きました。使徒パウロもまた、ユダヤ人から神無き民、希望なき民とされてきた異邦人のもとへ福音をたずさえて向かったのです。かつてアメリカの宣教師は、彼の地から、太平洋を越えて、ここまでやってきたのです。私どもも今日まで福音をたずさえて同胞に救いをもたらすために歩んできたのです。教会は、そのあるところにとどまっています。向こうへと、神を証しするために、伝道のために、イエスとともに嵐をついてこぎ出します。

この教会のキリストを証する歩みはしかし、ちようどこでイエスをお連れし、イエスとともにこぎ出した舟と同じく、激しい波風によつて行き悩み、死の恐怖に脅かされずに済むということはありません。

舟が教会を表すとすれば、海そして水は、旧約聖書以来、混沌、悪魔、そして死の力を象徴します。この舟の中に海の水が入り込み、水浸しになります。福音の力への信頼、イエス・キリストへの信仰が揺るがされます。希望を見失い、不安の中に投げ込まれます。

教会がそうであるだけではありません。私ども自身が、人生の逆風の中にある時には、試練と苦しみの中にある時には、希望をなくしがちになります。そうした私どもには、イエスは眠っている、眠り込んでしまっているようにしか見えません。神はいないと思われるのです。助けを求める思いもなえてしまいます。「わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言つて、イエスの力を懇願し祈ることすらもなくなるのです。

かくて教会も、私どもも、だれと一緒に歩んでいるか、私どもはどこにだれがいるのか忘れてしまいます。イエスと共に舟にいることを忘れてしまいます。この方がどのような方かということをおぼれてしまうのです。自分が逆境から抜け出すための都合のよい助けにしか見えなくなるのです。「わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」とは、そういう思いから出た言葉です。はたしてそれは、それでよい、ということだったのでしょうか。

3 恐れるな

弟子たちはみな、イエスではなく周りを見ていました。波と風、荒れ狂う湖を、不安げに見ていました。何か予想外のことが起きたかのようにです。申し上げたように海そして水は、旧約聖書以来、混沌、悪魔、そして死の力を象徴します。それに目を奪われていました。

彼らが思い起こさなければならぬのは、彼らとともに舟に乗っている主イエスです。今日の箇所が証するのは、イエスは、混沌、悪魔、そして死の力、そうした諸勢力に勝利し支配しておられるということです。そのようなこの方は神であるということです。「イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、黙れ、静まれと言われた。すると風はやみ、すっかり凪になった」（三九節）。詩編八九編一〇節に、「あなたは

誇り高い海を支配し、波が高く起これば、それを静めます」とあります。このような方が私どもの舟の中におられる。この方が私どもの主であります。どのような嵐の中にあつても、この方は主であることを、たとえ眠つていても、私どもに眠つていように見えても、主であることをやめたわけでないのです。それゆえに、イエスを起こして、助けを乞うという、信仰と信賴の行為と見える弟子たちの振る舞いも叱責されるほかないのです。

「なぜ恐がるのか、まだ信じないのか」。弟子たちは非常に恐れて、「いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか」と互いに言った（四〇〜四一節）

イエスは言います、君たちは、私が主であることを、私が共にいることを忘れたのか。信仰はある。君たちにはないわけではない。マタイでは「信仰の薄い者たちよ」と言われています。薄くとも、信仰はあるのです。まだ信じない（マルコ）、信仰が薄い（マタイ）というのは、本物の信仰になっていないということです。私どもの舟におられる方がどのような方か、知らなければならぬ。主イエスは「風と海」の、私どもの心だけでなく私どもの体も支配している、この世を支配する主であることを知り、信じ、従うことでなければなりません。人が真に恐るべき方を知るとき、私どものあれこれの恐れは克服されます。そう考えれば、「なぜ恐がるのか、まだ信じないのか」というイエスの叱責は弟子たちのさらなる信仰への、本物の信仰への招きでもありました。

今日の箇所は、向こう岸へ赴く教会の宣教の励ましとして、くり返し読まれてきたところです。またここは、恐れるな！ というイエスの言葉において、試練と苦難の中にある教会がくり返し聞いてきたところです。

ボンヘッファアの一つの説教が手許にあります。一九三三年一月一五日、ヒトラーが政権をとる二週間前の説教です。彼は嵐の予兆に恐れる教会に向かって不安にしておくことを誠める説教をしています（マタイ八章によつて）。その中でボンヘッファアはキリストが舟にいますところ、そこにはいつも嵐が吹き始めることを指摘することを忘れません。それゆえ教会の、そして私どもの歩みは、否応なく十字架の道とならざるをえないとも語っています。そしてその上でこう言っています。「キリスト者は、キリストと共に苦しみ、共に苦悩をなめるであろう。しかし、キリスト者は自分といつしよに舟の中におられ、すぐ起き上がって、海を叱られると、海も大なぎになるお方を、いつも仰ぐであろう」。このイエスが舟の中にいます。イエスは眠つておられるのではない。目覚めてともに歩まれます。イエスの乗り込んでおられるこの舟、イエスと共なる御教会の歩みに私どももあずかり、キリストの証しを力強くなしていきたいと思えます。

(二〇一九年二月一〇日)